

TS（トータル・サティスファクション）を目指して⑦「自己基準」

「『自分が弱いから負けた。』言えますか？」

校長室担当より

TOKYO2020オリンピック、パラリンピックが終わりました。日本柔道の快進撃には本当に興奮しましたが、その解説者を見ていて思い出したお話です。もう20年以上も前の話になるのが信じられないのですが、シドニーオリンピックの柔道決勝戦、後に国際柔道連盟が誤審だと認めた試合。失礼かもしれませんが、それなりの年齢の方はおそらくご存じのことと思います。フランス人ダビド・ドゥイエ選手の内股を内股すかして切り返し、日本代表の篠原信一選手は相手を畳に叩きつけていました。ところが、二人の副審のうち一人は篠原信一選手の”ippon!”と旗をあげていましたが、もうひとりの副審と主審は右手を斜め下に指し、相手のダビド・ドゥイエ選手の有効ポイントとしたのです。抗議がされましたが、判定は覆らず、この有効ポイントが勝敗の決め手となり、ダビド・ドゥイエ選手が金メダルを取ることになりました。篠原選手は、試合後もこの誤審については一切語らず、「(自分が)弱いから負けた。それだけです。」というコメントを残し、この試合について、「審判の判定など関係なく、相手にポイントでリードを許したあと、気持ちを切り替えられず、攻めきれなかった自分の弱さが敗因。」と言い切ったのです。海外サッカーの試合後に某監督がよく口にする、「審判の判定で負けた」といった恨み節など全く述べず、自分の弱さを原因に、負けを認めた篠原選手。その姿勢は多くの人の胸を打ちました。

人を責めず、自分の弱さを見つめ、負けを認める。人間の真価、強さ、本性は、逆境で試されるものです。実社会においても同じです。理不尽な状況や自分が苦しい場面、自分に不都合な状況に出くわした時に、人間の本性が現れます。大きな声を出して物に当たったり相手を非難する人、逆に隠したりごまかしたりする人、見て見ぬふりをする人、投げ出して逃げることを選択する人、嘘をついて取り繕う人、原因を他の人のせいにして責任を押し付ける人がいます。その一方で、同じ状況下でもぐっと堪えながらも周囲に対する配慮を欠かさず、自分にできることを思直に行動に移し、これを成長につなげていける人もいます。そのような人は、自分の所属する場や組織がどこであろうとも、その力を際立

たせて成長を重ねています。全国大会で優秀な成績を収め続ける、東福岡高等学校バレーボール部監督の藤元聡一先生は、このような力を「理不尽を飲み込む力」と名付けておられ、教育活動の中で身につけさせるべき、非常に大切な力であると指摘しておられます。本校においてもこの力を持って実践・行動されている方が多くいらっしゃいますし、私自身は心からリスペクトしています。

こう考えると、私たちがつい犯しがちなことですが、「自分中心の損得勘定」で感情的な判断をするのではなく、「人間として成長していくための自己基準」で判断することを、当たり前のこととして徹底して習慣化することを私たちは求められているのだと思います。私たちは教育のプロとしての勉強とともに、人間としての勉強を重ね、お互いに鏡となって成長し合うことで、児童生徒のモデルとなる必要があります。自分自身と正面から向き合って、いい学校を創りましょう、一緒に。(令和3年9月8日)

本校教職員として目指す方向性(確認) ※4月1日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の3悪の撲滅